工作員

フリッツ

Agent
Fritz Klein
Age / 20

問い続けろ
一度引き金を引けば、
もう戻れない

SECTOR VITA
UNDER GROUND
X - 782.51
Y - 414.62
LAST RECORD
17:00:00
SIGNAL STATUS
ALIVE



PROFILE

前線で戦うことは少なく、主に偵察や潜入など、影から戦場を支える任務を担っている。その判断と行動は、多くの戦況を左右してきた。

ストーリー （公開情報）

数百年前、アンドロイド産業は飛躍的な発展を遂げた。
開発者のアンディ博士は、人類とアンドロイドが共存する夢を見て、人間に限りなく近いアンドロイドを生み出した。だが、アンドロイドはやがて思想の違いから二つの派閥に分かれる。

人類との共存を望む穏健派と、人類そのものを否定し、滅ぼすべき存在とみなす過激派である。
穏健派アンドロイドは、人間と見分けのつかない外見、そして、共存を望む平和な意志。
彼らは人間との争いを避けるために、人類の前から姿を消した。

過激派アンドロイドは、人間の外見を捨て、強硬な意志を持ち、人類との戦争を選んだ。
激しい戦いの末、この戦争は人類の勝利で終結したと記録されている。
戦争の終結後、長い沈黙を経て、穏健派アンドロイドは再び人類の前に姿を現した。

そして 2XXX 年――人類と穏健派アンドロイドの間で、ついに正式な共存協定が結ばれた。
そして、人類と穏健派アンドロイドによる連合組織《ユニオン》が発足する。
だが、その瞬間を境に、世界は再び崩れ始めた。

協定の成立、そしてユニオンの結成とほぼ同時に、過激派アンドロイドによる全面攻撃が開始されたのだ。――敗北したはずの過激派アンドロイドたちは、滅びていなかった。
彼らは長い年月、影に潜みながら、その機会を窺っていたのだ。

穏健派アンドロイドはユニオンの一員として人類に協力し、過激派アンドロイドとの《第二次アンドロイド戦争》に突入した。その戦いの中で大量破壊兵器が使用され、地上環境は急速に汚染された。
都市は崩壊し、多くの人命が失われる。生き残った人類は、わずか一億にまで減少した。

限られた資源、減り続ける兵力。この戦争を生き延び、そして勝利するために、
ユニオンは新たな生命を創造するという選択に踏み込む。

研究施設《セクター・ヴィータ》。
そこは、ユニオンによって造られた、生命を再構築し、記憶を継承するための領域。
そこで生み出されたのは――人類の意志を宿す、新たな生命《託生者（たくせいしゃ）》だった。

登場人物　（公開情報）



統括官 / ヘクター・ソリス（NPC）：Hector Solis

人間。４５歳。男性。

セクター・ヴィータにおける最高責任者。一般的に『**統括官**』と呼ばれている。主に戦闘指揮を担い、兵士一人ひとりの命を背負う立場として、可能な限り犠牲を抑えることを責務としてきた。彼にとって、穏健派アンドロイドの生命もまた、人間と同等の価値である。しかし、人類存続のためであれば、冷酷な決断を下すことも厭わない覚悟を持っていた。



ルピナス（NPC）：Lupinus

穏健派アンドロイド。製造から数十年が経過している。女性型。

セクター・ヴィータでは統括官の補佐を務めると同時に、穏健派アンドロイド全体を束ねる指導者的立場にある。主に施設の管理・制御を担う。人類との共存を望む穏健派アンドロイドの意志を受け継ぎ、その象徴として創られた存在。

数年前に身体を損傷したが、資源不足により修復は不可能。

そのため、現在は生命維持ポッドの中で過ごしており、連絡を取る際はモニター越しに通信を行う。



研究者 / アレク・ヴァレン：Alec Valen

４５歳。男性。一人称は「わたし」

《託生者創造計画》を主導した人物であり、計画の立案から実行までを担った科学者。託生者の創造技術と倫理構築、その両面に深く関わっている。



カウンセラー / バーバラ・ロウ：Barbara Rowe

２０歳。女性。一人称は「わたし」

ユニオンの兵士および託生者の情報記録を管理する担当者。

戦闘記録や個体データの整理に加え、戦場に立つ者たちの精神を支える役割も担っている。

登場人物　（公開情報）



オペレーター / クララ・ヴァレン：Clara Valen

２０歳。女性。一人称は「わたし」

セクター・ヴィータのオペレーターを務める非戦闘要員。

戦闘能力は持たないが、統括官の指揮のもと、戦場に展開する兵士へ情報・命令を伝達し、後方から作戦を支えている。



突撃兵 / ディーン・カルダー：Dean Calder

40歳。男性。一人称は「俺」

戦闘能力を備えた最初の託生者として誕生し、数多の戦場で成果を残してきた存在。セクター・ヴィータの象徴的戦力であり、勝利の要でもある。

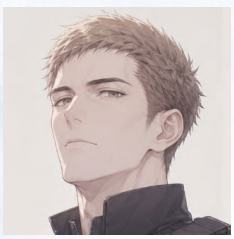


遊撃兵 / エヴァ・ソリス：Eva Solis

２２歳。女性。一人称は「わたし」

統括官の娘として生まれ、人間の兵士として前線で戦果を重ねてきた。

託生者となった後も、その選択を疑うことなく、人類のために戦い続けている。



工作員 / フリッツ・クライン：Fritz Klein

２０歳。男性。一人称は「俺」

前線で戦うことは少なく、主に偵察や潜入など、影から戦場を支える任務を担っている。その判断と行動は、多くの戦況を左右してきた。



参謀 / グレイ・ノア：Gray Noah

２２歳。男性。一人称は「僕」

極めて高い情報処理能力を備え、変化する戦場の状況に即応できる。統括官の指示が届かない現場においても、自ら判断を下し、その選択によって多くの仲間の命を救ってきた。

キャラクター背景

10 年前

第二次アンドロイド戦争が開戦して間もなく、父は連合組織《ユニオン》の兵士として戦地に向かった。今でも覚えている。

「必ず帰ってくるからな。それまで、フィオナを――母さんを頼む」

そう言って、父は俺の頭を軽く撫でた。そして、少しだけ真面目な顔になって続けた。

「フリッツ。正しく生きろ。けっして、胸を張れないことだけはするな」

父はそう言って、やわらかく微笑んだ。しかし、その言葉を最後に、父は帰ってこなかった。

父は多くの命を守って死んだ。戦死したと知らされたとき、俺は呆然と立ち尽くしていた。

母に手を引かれながら、母の顔を見つめる。決して、母は泣かなかった。

……ただ、俺の手を強く握り続けてくれた。

母に連れられて辿り着いたのは、統合生存圏だった。

戦争を生き延びた人類が集約され、生活のすべてが一元管理される場所である。

だがユニオンは、戦えない者たちを差別した。俺たちに与えられたのは、統合生存圏の中心から遠く離れた区画だった。そこは、とても住居と呼べるような場所ではない。ただ白線で区切られただけの空間に、人々が押し込められているだけだった。

あちこちから不満の声が上がる。怒りと諦めが入り混じったざわめき声が、耳にまとわりつく。

配給もわずかで、列のあちこちでは小競り合いが起きていた。

前へ割り込もうとする者。弱い者を押しのける者。床に落ちた食べ物を奪い合う者。

泣いている子どもがいても、誰も振り返らない。腹を空かせた俺は、そんな光景を見ているうちに、いつの間にか周囲につられるように不満を口にしていた。

「……なんなんだよ、こいつら。みんな自分のことばっかりだ」

吐き捨てるように言うと、母は俺の手をそっと握った。

「つらいよね、こんな世界……。フリッツがそう思うのも、無理ないよ」

母は、騒ぎの向こうを見つめるようにして、静かに続けた。

「苦しいからって、誰かを押しのけたり、傷つけたりしていいわけじゃない。そんなふうにして生き延びても、きっと胸は張れないから」

それから母は、ゆっくりと俺の方へ視線を戻した。

「あなたのお父さんはね、つらくても、怖くても、そういうところから逃げなかった人だった。誰かを守るために、自分が正しいと思ったことを選び続けたの」

「フリッツもね、自分が正しいと思える道を選べる人でいてね」

そう言って母は俺を抱き寄せ、ぎゅっと強く抱きしめてくれた。

その腕は温かかったが、母の表情はどこか寂しそうで、どこか苦しそうだった。

やがて統合生存圏に、穏健派アンドロイドが秘密裏に建設していた、地下シェルターが人類へ提供された。地上の劣悪な環境に耐えられない人類が優先され、移住は段階的に進められていった。
最初に避難した第一次移住者は、ユニオンの人類側の要人たち。
次に、妊婦をはじめとする保護対象の集団。――俺たち家族は、最後だった。

俺は好奇心に駆られ、シェルターの様子をこっそり見に行った。
統合生存圏の中心にそびえ立つ搬入エレベーターの前には人があふれ、百人以上を収容できるという巨大な箱が、鈍い音を立てながら上下していた。その光景に、幼い俺はただ目を輝かせていた。

そのとき、不意に近くの兵士たちの会話が耳に入った。
「……おい、本気かよ。妊婦が多いんだぞ」
「この世界に倫理観なんて残ってない。第一次移住者の要人たちは笑って言ったよ。一人殺せば、二人減る。一石二鳥だ。人口なんて、戦争が終わればいくらでも増やせるってさ。……これは命令だ。第二次移住者は、見せしめとして処理する」
言葉の意味を理解した瞬間、胸の奥が凍りついた。
逃げなければと思った瞬間、兵士の視線がこちらに振り向いた。
「おい……今の、聞かれてたんじゃないか」
銃口が、ゆっくりと俺に向けられる。恐怖で足がすくみ、俺はただ助けを求めて叫んだ。
だが周囲の人間たちは一瞬こちらを見ただけで、すぐに目を逸らした。
巻き込まれたくない――幼い俺にも、それが分かった。引き金が引かれ、銃声が響く。
――だが、痛みは来なかった。恐る恐る目を開けると、地面には弾痕が刻まれている。
目の前には、兵士の銃を押さえつける男が立っていた。

「銃弾を無駄にするな。それは、同胞に向けるものじゃない」
兵士は舌打ちし、シェルターの方へ走り去っていく。男はゆっくりと振り返った。
「大丈夫か？」
それが、ジェイとの出会いだった。
俺はジェイに礼を言い、早口になりながらも、さきほど兵士たちから聞いたことをすべて伝えた。
ジェイは静かにうなずき、俺の目をまっすぐ見て言った。
「安心しろ。俺もユニオンの一員だ。そんなことはさせないし、許されるわけがない。この件は俺も調べる。だから、今日はもう帰りな」
そう言って、ジェイは俺の頭を軽く撫で、やわらかく微笑んだ。
その笑顔はどこか父の面影を思い出させる。
その手の温もりに、ほんの少しだけ救われた気がした。

だが翌日、母から知らされたのは、残酷な現実だった。
地下シェルターへ避難した第一次移住者と第二次移住者、あわせておよそ三千万人が命を落としたという。発表では、地下シェルター内の防衛システムが過激派アンドロイドに掌握され、内部に備えられていた銃火器が暴走、多くの犠牲者を出したらしい。
この事件は後に【シェルター制御喪失事件】と呼ばれた。

それからしばらくして、生き残った人類の地下シェルターへの移住が再び始まった。
内部の防衛システムはすべて撤去され、その代わりに、入口の防衛だけが徹底的に強化された。
最後の順番である俺たちの移住は、来週に予定されていた。
地下シェルターへ行けば、今よりは安定した暮らしができるのだろうか。
そんな不安を抱えながら、俺は母が持ち帰った配給のパンをかじっていた。
「また、味気ないパン……」
思わずこぼれた言葉に、母は少しだけ困ったように笑う。
「もらえるだけでもありがたいんだから、文句言わないの」
そんな母を見ると、ふと気がついた。母は泥の付いた汚れたパンを食べていたのだ。
「どうしたんだよ、それ。まさか、そんなパン渡されたの？」
「……ちょっと、落としちゃって。フリッツは気にしなくていいよ」
そう言って母は、何かを隠すように、誤魔化すような仕草を見せた。

翌日、母はいつも通り配給を受け取りに出かけた。だが、いつまで経っても帰ってこない。
時間が過ぎるほどに胸の奥がざわつき、不安がじわじわと広がっていく。
気づけば俺は立ち上がり、母の姿を探しに、外へ飛び出していた。
その途中、耳に飛び込んできた会話があった。
「聞いたか？ 配給に文句つけて暴れたやつがいたらしい、他人の分を奪おうとしたとか……」
嫌な予感がして、俺は配給所へ走った。
そこに広がっていたのは、血の匂いと、倒れ伏す人影だった。
警備隊に制止されながらも、俺はその隙間をすり抜けるように駆け込む。
そして――見つけてしまった。血まみれの母を。

床に崩れ落ちたその手には、配給の包みが、まだ握られている。
離さなかったのだろうか。最後まで。……そのときだった。視界の端で、動く影があった。
顔を上げる。捕らえられた大柄な男と、目が合った。
男は――笑っていた。あいつが、母を……。
胸の奥で、何かが弾ける。身体が、勝手に前へ出る。
「殺してやる！」

母を殺して、それでも笑っている男が…生きていていいはずがない。
だが、踏み出した俺の身体を、強く引き止める力があった。
「……すまない。間に合わなかった」
それは、ジェイだった。

必死に振りほどこうとする俺を、ジェイは押さえ続ける。
その間にも、男は挑発するように、こちらを見据えていた。
そこへ、統括官と呼ばれる男が現れた。
「お前が、この配給所で二人を鉄パイプで撲殺した。間違いないな？」
「だからどうした？お前らのせいだろ。こんな少ない食糧で、どうしろってんだ。
むしろ、食い扶持を減らしてやったんだ。感謝してほしいくらいだ」
統括官は、ゆっくりと空を見上げた。
「……ユニオンの要人は、全員死んだ。この統合生存圏に、もはや“法”は存在しない」
そして一歩下がり、俺を見る。
「だから、この男を裁く者はもういない。今のユニオンで、奴を裁けるのは…母親を殺された、君自身だろう」
統括官は、俺の手に銃を握らせた。ずっしりとした重み。本物の拳銃だった。
俺は、拳銃を構える。だが、さっきまでの勢いは、もうどこにもなかった。
腕が震え、銃口は定まらず、小刻みに揺れる。ふと思い出すのは、両親の言葉だった。
――胸を張れないことだけはするな。
――自分が正しいと思える道を選べ。
二人の声が、頭の中で何度も繰り返される。

……だったら、これは正しいはずだ。こいつは母を殺した。
何の罪もない人を殺して、それでも笑っている。
ここで終わらせなければ、また誰かを傷つけるかもしれない。
こいつを撃つことが、俺の選ぶべき道なんだ。
そう自分に言い聞かせる。だが、引き金にかけた指は動かなかった。
胸の奥で渦巻いているのが怒りなのか、恐怖なのか、それとも人を殺すという現実の重さなのか、もう自分でも分からなかった。
「統括官！　こんなこと、少年にさせるべきじゃない！」
「ジェイ。お前はどうだった。過激派アンドロイドに両親を殺されてから、その復讐心は消えたか？
　それとも、今もお前を追い詰めているか？」
ジェイは答えなかった。統括官は、俺に視線を戻した。

「復讐を奪われた者は、救われない。だから、この子には“選ぶ権利がある”。憎しみをここで終わらせるのか。それとも、この先も抱えて生きるのか。どちらを選ぶかは、君自身だ」
その言葉に、俺はもう一度、男を見た。自分で選ぶ。正しいと思える道を。
やっぱり、これしかないんだ。
「……心配なら――お前が、この少年を支えてやれ」
ジェイは、俺の背後から震える手を包み込むように支えてくれた。その手の温もりが、震えを少しずつ鎮めていく。揺れていた銃口が、ゆっくりと男を捉えた。
父さん。母さん。これで、いいんだよな？
怒りが消えたのか、恐怖を飲み込んだのか、それは分からない。
ただ、引き金にかけた指をゆっくりと動かした。そして――銃声が響いた。



母の遺体が運ばれていく。黙祷を終えた統括官は俺に言った。
「私の娘も、ここで配給を受けていた。今は錯乱しているが、君の母親に助けられたと聞いている。大きな恩義がある。丁重に弔おう」
そして、静かに続けた。
「……戦争は今も、これからも続くだろう。だが、争いの種は、人類の中にも残っている」
統括官は俺を見て、こう言った。
「フリッツ。我々の敵は過激派アンドロイドだ。それは、人類を救うためだ……しかし、全員を救えるとは思っていない。救うに値しないものもいるからだ。そんな人間を、君は知った……。ジェイが所属する小隊では、表の軍ではできない仕事がある。だが、その影で世界は保たれる。フリッツ、君に兵士になれ、とは言わない。だが、選別者になれ。この世界に、君が望む未来を残すためにも……生きるべき存在と、そうではない人間を見極めるんだ」
その言葉は、幼い俺には残酷なくらいまっすぐ響いた。

母を殺した男の顔が浮かぶ。母さんみたいな人が死んで、ああいう人間が生きているのは間違っている。なら、誰かがそれを止めなければならない。統括官は最後にこう言った。
「……もし、興味があれば、私のもとに来てくれ」
そう言い残し、統括官とジェイは去っていった。
二人の背中が見えなくなったあとも、俺はその場から動けなかった。

母の血の匂いも、銃声の残響も、まだ耳の奥に残っている。あの男を撃った。母の仇を討った。
きっと、これが俺の選ぶべき道だった。だが、胸の奥に残っていたのは、達成感なんかじゃなかった。
ただ、重く沈んだ痛みだけだった。それでも俺は、自分に言い聞かせた。
……これでよかったんだ、と。
自分で選んだ道なんだから、苦しくても進まなければならない。
そう思わなければ、引き金を引いた自分を受け止められなかった。

それからほどなくして、地下シェルターへの移住は完了し、子ども一人には広すぎる居住スペースが与えられた。静まり返った空間の中で、俺はあの銃声の意味を何度も考え続けた。
そして――搬入エレベーターに乗り、地上へ向かった。
統括官から渡された座標データを頼りに辿り着いたのは、セクター・ヴィータ。
そこは統括官と穏健派アンドロイド《ルピナス》が管理するユニオンの研究施設だった。

俺は、ジェイの率いる小隊に所属することになる。
少年兵に年齢など関係ない。強い意志さえあれば歓迎すると、統括官は言った。
ジェイ小隊の目的は、ユニオンに仇なす存在の制圧。
それが、正しい人間になるための道なのだと、俺は信じていた。

8年前
セクター・ヴィータに来て、しばらく経った頃。俺は、初めてジェイの率いる小隊と共に任務へ出た。
対象は、過激派アンドロイドではない。人間だった。
居住区で孤児や難民を攫い、どこかへ引き渡している男。噂では、その一部が過激派アンドロイドへ渡っている可能性もあるという。確認と拘束。それが今回の任務だった。
統括官は短く言った。「確認が最優先だ。まだ殺すな」

居住区の外れは薄暗かった。使われなくなった居住ブロックや倉庫が並び、人の気配は少ない。
俺たちは三人で通路の陰に身を潜め、男の動きを待っていた。ジェイが低い声で言う。
「焦るな。相手だけを見るな。逃げ道と、隠れてる奴の気配を探せ」
俺は小さく頷いた。だが胸の奥では、心臓がうるさいほど鳴っていた。

やがて男が現れた。大きな袋を抱え、周囲を警戒している。
袋の口から、小さな手が覗いていた。――子どもだ。助けなきゃ。
そう思った瞬間、俺はジェイの合図を待たずに飛び出していた。
「待て、フリッツ！」
男へ銃を向ける。足でも、撃ってしまえばいい。そうすれば、あの子を助けられる。
俺は引き金に指をかけた。「撃つな！」
その瞬間、ジェイが横から俺の銃を押さえた。
後方の隊員が男へ飛びかかる。男は抵抗したが、ほどなく地面へ押さえつけられた。
袋の中から、怯えた子どもが顔を出している。俺よりも、ずっと幼い。子どもは助かった。

帰還後、小隊の兵士が俺を睨んだ。彼は、静かに怒りを示した。
「なぜ勝手に動いた？　助けたいという気持ちだけで、命令を無視していいわけじゃない。もし子供に当たっていたら？　仲間が近くに潜んでいたら？　お前の独断一つで、任務も仲間も危険に晒すことになる。あの判断は早計だ」
早く子どもを助けるために、あれは正しいことだと思った。
「こんなガキを現場に出すからだ。足手まといだろ」
悔しいのに、何も言えない。俺は拳を握ることしかできなかった。そのときだった。
「そいつを連れてきたのは、俺だ。全ての責任は俺が取る。文句があるなら、俺に言え」
兵士は舌打ちしたが、ジェイは視線を逸らさなかった。
やがて兵士は「……好きにしろ」と吐き捨て、立ち去っていく。

「……ごめんなさい」
ようやく出た言葉は、それだけだった。ジェイは困ったように笑う。
「ミスは誰でもする。これも経験さ」
俺は黙って俯いていた。ジェイは静かに続ける。
「ただ一つだけ、忘れるな。その銃弾は、人の命を簡単に奪える。だから、引き金を引くときも、人を捕まえるときも、それが本当に“正しい”のか、問い続けろ。……一度引き金を引けば、もう戻れない」
そして、少しだけ間を置いた。
「それでも、“選んだなら、その意志を貫け”」
俺は小さく頷いた。けれど、胸の奥はざわついたままだった。

正しいことは、もっと単純で分かりやすいものだと思っていた。悪い人間を止めて、困っている人を助ける。そして、胸を張れないことをしないこと。そうやって、迷わず選べるものだと思っていた。けれど、ジェイは問い続けろと言った。なら、考え続けなければ、正しい道は選べないのかもしれない。

ジェイは、それ以上なにも言わず、先に歩き出した。その背中を見ながら、ふと思う。
この人についていけば、きっと進むべき道を間違えない。――その背中は、少しだけ父に似ていた。

5年前
ジェイは統括官の右腕として、直属の命令を受けながら任務を遂行していた。
その傍ら、俺はジェイのもとで技術を磨き、幾度も共に戦場へ赴いてきた。
今日の任務は、ジェイと二人だった。

彼は決して、俺に標的へのとどめを任せようとはしなかった。
「人を殺せば、一つ、また一つと重みを背負うことになる。せめて二十歳までは、俺に任せろ。お前が背負うのは、まだ、あの男だけでいい」
その言葉は、まるで俺の心を覗いているようだった。
あの日撃った男の顔は、今でも夢に出てくる。人を殺せば、その瞬間が呪いのようにまとわりつく――ジェイは、よくそう言っていた。
けれど同時に、あのとき背後から支えてくれたジェイの腕の温もりも思い出す。
もし一人で引き金を引いていたなら、きっと俺は、その重みに押し潰されていただろう。
彼には感謝している。……だからこそ、思う。
ジェイが背負っている重みを、支えてくれる人はいるのだろうか、と。

ターゲットは、過激派アンドロイドとの繋がりが噂されている人間だった。
いわゆるスパイといった存在だ。
任務は、その真偽の確認と対象の確保。俺たちは地上の指定座標へ向かった。

そこには、小袋を抱え、マスクをつけた男が立っていた。
周囲を警戒しながら接近し、俺が背後から男の動きを封じる。
ジェイが素早くマスクを剥ぎ取り、銃口を額に突きつけた。
「過激派に情報を流している人物がいると聞いていたが……ん？お前は、確か……」
ジェイの声色が、わずかに変わる。
「お前、ジェイか？ハハハ……俺を粛清しに来たのか。まだ、あの男についているのか？なぁ、いい加減目を覚ませよ……ああ、そうか。お前も“そっち側”だったのか。統括官の右腕であるお前が、知らないはずないよな！？お前も結局、人の命を――」
その瞬間、鋭い閃光が走り、男の頭部が弾け飛んだ。

俺とジェイは即座に距離を取り、戦闘態勢を取る。
瓦礫の影から姿を現したのは、異形の装甲を纏ったアンドロイド。

片腕に組み込まれた銃口が、こちらを向いていた。
「ヒトリデコナカッタ、ヤハリニンゲンハ、シンヨウナラナイ」
機械音声が、空気を震わせる。
「過激派アンドロイド…！！」
ジェイが怒りを露わに、低く告げる。
ジェイは両親を過激派に殺害された過去を持つ。だが、敵の数は不明、この場での交戦は不利だ。
俺はジェイに撤退を提案すると、彼は渋々受け入れた。
ジェイは制圧射撃で牽制し、俺たちは後退する。幸い、敵はそれ以上追撃してこなかった。
安全圏まで退いたとき、俺は気づく。
ジェイの手には、先ほど男が抱えていた小袋が握られていた。

帰還後、ジェイは統括官に報告した。過激派の口ぶりから、ターゲットは接触を図ろうとしていた可能性があること、そして過激派アンドロイドの介入により死亡したことを。
だが、小袋のことは報告しなかった。ジェイは部屋を出ると俺にこう言った。
「黙っていてくれてありがとう…。調べたいことがあるんだ」
ジェイはそう言って、その場を後にした。だが、それ以降、彼からの説明は何もなかった。

3年前
その日、ジェイから《託生者創造計画》の話を聞いた。
ユニオンの技術で新たな生命を創造する計画が、いよいよ最終段階に入ったという。
《託生者》とは、人工的に生成された人間の体に、心臓の代わりとなるアンドロイドのコアを埋め込んだ存在だ。コアに記録された戦闘技術を駆使し、兵士として戦う。さらに、肉体が失われても、新たな体を生成することで蘇ることができるらしい。俺たち二人は、その実験施設の警備を任されていた。だが、内部は機密扱いで、俺たちは入口の外で待機しているだけだった。

しばらくして、突然だった。中から、激しい物音が響いた。何かが落ちた音。そして――銃声。
ジェイと目を合わせる。次の瞬間、俺たちは同時に扉を突破した。中には侵入者がいた。
銃を構えた男がこちらへ振り向く。俺とジェイは即座に反撃し、侵入者を無力化した。
だが――視界に入った光景に、思わず息を呑む。床は血で濡れていた。そして、床に倒れた二人の女性。誰かまでは分からない。ただ、手遅れだということは予想できた。
静まり返った室内に、「バイタル異常！」と、モニターが警告音を鳴らす。
「すぐに処置を！」誰かが叫んだ。
俺とジェイは、拘束した侵入者を引きずるようにして、実験室を後にする。
くそっ……一体どこから現れたんだ。
別部隊に侵入者を引き渡し、俺たちは統括官へ報告して、その日は解散となった。

翌日、統括官に呼び出されると、すでにジェイが待っていた。
部屋のモニターには、一人の人物が映し出されている。
「あなたがフリッツですね。初めまして。私はルピナスと言います」
落ち着いた声が部屋に響く。
彼女はアンドロイド側の代表で、現在は統括官の補佐をしていると聞いたことがある。
「昨日の件について、報告があります」
静かな声で、ルピナスは続けた。

昨日の襲撃で、セレナというアレクの妻が死亡した事実を伝えられた。
そして、クララが託生者として、処置されたことを告げられる。
俺は拳を強く握りしめる。——とんだ失態だった。

続いて、侵入者の概要が伝えられた。あれは人間の皮膚を纏った過激派アンドロイドだった。
外見を偽装するため、内部構造は極限まで削り落とされており、自爆機能も搭載されていなかったという。セクター・ヴィータの防衛体制の即時強化が決定された。だが同時に、一つの疑問が浮かぶ。
「侵入者は、どうやって研究室に？」
統括官は神妙な面持ちで答えた。
「……内部に、過激派へ情報を流している者がいるようだ」
室内の空気が重くなる。その沈黙を破ったのは、ジェイだった。

「統括官。そのスパイについて、心当たりが…。二年前の任務で、過激派との繋がりを噂され、始末されたターゲットについてです。彼は【シェルター制御喪失事件】で、第一次移住者の護衛をしていた、ユニオンの兵士でした。そいつとは古くからの友人で…とても、臆病な男でした。そんな男が、過激派に協力していたのは事実でしょう。ただ、あの事件で、何かが彼を変えた。統括官。何か、思い当たる理由はありませんか？」
たしか……母が亡くなる数日前、三千万人が犠牲となった事件のことだ。
統括官は静かに窓辺へ歩み寄った。
「シェルター制御喪失事件……。あの日、私はシェルターの中にいた。そしてジェイが——いや、フリッツが伝えてくれたように、第二次移住者の虐殺は実際に起きていた。私は上官から、地上の暴動を抑えろと命じられた。やむなく向かった。一部の人間しか知らない、もう一つの搬入エレベーターを使ってな」統括官はそこで言葉を切る。
「だが、その直後、防衛システムが過激派に掌握された。あとは発表通りだ。……第一次移住者の罪を覆い隠すように、シェルター内の人類は死んだ」そして、低く続けた。
「ジェイの友人は……その命令が嫌で、どこかに身を潜めていたのだろう。妊婦を射殺するなど、馬鹿げた命令からな」俺は呆然と立ち尽くしていた。

つまり――第一次移住者が、本当に第二次移住者を殺していたというのか。
あのとき耳にした兵士たちの会話は、聞き間違いではなかった。本当に起きていたのだ。
それに、もう一つの搬入エレベーターの存在も、初めて知った。
ジェイは一度頷き、ルピナスへ視線を向けた。
「ルピナスも、この件を知っていたのか」
「……はい。ですが事実が公表されれば、世論の反発は避けられず、ユニオンは分裂していたでしょう。統括官と協議の末、要人たちの罪を隠蔽することにしました」統括官が振り向く。
「理解してほしい。この事実は公表すべきではない。ユニオンは今、セクター・ヴィータを中心に辛うじて機能している。もし露見すれば、混乱は避けられない。過激派を前に、ユニオンは抗う力を失うだろう」
そう言って、深く頭を下げた。

「……安心してください。二人の口から事実を確認したかっただけです。俺たちは引き続きスパイの存在を探ってみます。フリッツも、それでいいな？」
ジェイの問いに、俺は黙って頷く。ジェイは先に部屋を出た。俺も続こうとしたとき、統括官に呼び止められる。
「フリッツ、頼みがある。……ジェイを気にかけておいてくれ。長い付き合いだ。あいつが、命を賭けて何かをしようとしていることだけは分かる。……どうか、二人とも死ぬな」
統括官は、何かに気がついているのだろうか。だが、ジェイを心配していることは伝わった。

それからしばらくして、俺たちは過激派アンドロイドの制圧任務に出た。
過激派アンドロイドを相手するのは久しぶりだ。敵影を見たとき、俺は無意識にジェイの横顔を見ていた。両親を過激派に殺されたジェイなら、何かしら感情を見せると思っていたからだ。

だが、その日のジェイは静かすぎた。敵影を確認しても、表情が動かない。
怒りも、憎しみも、何も見えなかった。
俺たちは予定通り施設へ突入し、短い交戦の末、過激派アンドロイドを制圧した。
最後の一体が倒れ、あたりに静けさが戻る。その残骸を、ジェイはただ見下ろしていた。
「……憎い？」俺は思わず聞いた。
ジェイは、ゆっくりと視線だけをこちらへ向ける。
「昔の話だ。……今は、何も感じない」
腑に落ちなかった俺は、帰り道にもう一度だけ聞いた。
「本当に、何ともないの？」ジェイは前を向いたまま答えた。
「何も感じない方が、楽なこともある」
その言葉だけが、妙に頭に残った。

半年前

戦争は終わる気配もなく、今も続いている。大きく変わったことがあるとすれば、圧倒的な資源不足だ。物資だけではない。人も、だ。

ユニオンの人間兵士、アンドロイド兵士も、戦える者は一人、また一人と消えていった。

だが、そんな俺たちにも希望はあった。託生者の存在だ。

現在、セクター・ヴィータにはディーンとグレイ、戦闘に特化した二人の託生者がいる。

ディーンはアンドロイド最強の戦闘技術を持つコアを宿し、グレイは卓越した情報処理能力で、戦場にいながら的確な指揮を執る。この二人によって、救われた命は決して少なくない。

その日、俺は二十歳の誕生日を迎えた。だが祝う暇もなく、統合生存圏に大規模な襲撃が発生する。

過激派アンドロイドは、地下シェルターへ繋がる搬入エレベーターへ向けて進軍を開始していた。

搬入エレベーターの位置は、ユニオンにとって最大級の機密だ。――やはり、内部にスパイがいる。

俺はすぐに統括官のもとへ向かった。だが、そこにジェイの姿はなかった。

統括官の表情には、はっきりと焦りが浮かんでいる。

「ジェイから連絡があった。……スパイを見つけた、と」

そう言って、端末に座標を表示した。

「ジェイの位置を特定した。ここへ向かってくれ」

俺は全力で走った。一人じゃ危険すぎる。ただ、無事でいてくれ――そう願いながら。

現場の座標へ辿り着く。そこに、ジェイの後ろ姿があった。

その正面には、過激派アンドロイド。二人は戦うでもなく、ただ向き合っている。

ジェイは何かを取り出し、アンドロイドへ差し出した。

「代償は既に支払った通りだ……これを解析してくれ」

その言葉を聞いた瞬間、足が止まった。……何をしている？ジェイがゆっくりと振り向く。

俺と目が合った。一瞬、驚いたような顔。だがすぐに、諦めたように小さく息を吐いた。

「来たか」

その視線が、俺の持つ銃を捉える。そして、静かに言った。

「……もう、わかっただろ」

短い沈黙。俺の喉が、乾く。

「……ジェイ。お前……まさか」

ジェイは、まっすぐこちらを向いた。

「そうだ。スパイは俺だ」

胸の奥が焼けるように熱くなる。裏切られた。その感情だけが、はっきりとした。

俺は銃を抜き、ジェイへ向ける。指が震える。銃口が、わずかに揺れた。



ジェイは、それを見て小さく笑った。
「……そうだ。それは同胞に向けるものじゃない」
やわらかな微笑みだった。その瞬間――ジェイの声が、頭の奥で蘇った。
“引き金を引くときも、人を捕まえるときも、それが本当に “正しい” のか、問い続けろ。……一度引き金を引けば、もう戻れない “
あのときは、意味なんて分からなかった。けれど今、初めてその言葉が俺の指を止めていた。
正しさは、ただ撃てば証明できるものじゃない。そう思った瞬間、俺は引き金を引けなくなっていた。
俺には、なぜそんな顔をするのか、分からない。ただ――その表情を見るたびに、俺は父の面影を重ねていた。いつの間にか、ジェイは俺にとって父のような存在になっていた。
だから、訳の分からないまま終わらせたくなかった。震える銃口が、わずかに下がる。その瞬間だった。
過激派アンドロイドの銃口が、ジェイを捉える。考えるより早く、俺は駆け出していた。
ジェイの体を押し倒す。閃光が走る。
次の瞬間。ジェイの体とともに、俺の体は撃ち抜かれていた。

……真っ暗な世界。ここは死後なのだろうか。やがて闇が薄れ、視界がゆっくりと開けていく。
目の前に立っているのは――死ぬ直前の俺だった。
「そうだ。スパイは俺だ」
目の前の俺は、苦しげな表情で銃を構えている。
これは、さっきの記憶だろうか。だが、どこか違う。これは――ジェイの視点？

次の瞬間。俺は、俺自身に突き飛ばされる。閃光。体を貫く衝撃。
過激派アンドロイドは、倒れた俺たちを一瞥すると、その場を去った。
「フリッツ！どうして……！」地面に広がる血は、一人分ではない。ジェイも重傷だった。
それでも俺を抱え、足を引きずりながらセクター・ヴィータへと向かう。
息を荒げながら、ジェイはぽつりとかすれた声で語り始めた。
「シェルター制御喪失事件。ユニオンが隠した、あの大量虐殺。本当に正しかったと思うか？」

わずかな沈黙のあと、ジェイは続けた。
「フリッツ、お前はまだ、あの事件の真実を知らない……。これ以上――あいつに背負わせるわけにはいかないんだ」
セクター・ヴィータにたどり着くと、俺たちは研究室に運ばれた。そこでは、アレクが待っていた。
「……アレク、頼む。フリッツを託生者に。コアなら、あそこのジェラルミンケースにある。統括官から、緊急時に託されていた」
アレクは鍵を受け取り、ケースを開く。中には、一つだけコアが残されていた。
「……コアは一つだ。ジェイ、君はいいのか」
「元々俺は……あの実験以降、壊れてしまっていたんだ。結果、フリッツのことを裏切ることになってしまった…。こんな世界に正しさがないことは知っていたのにな…。だからこそ……フリッツに伝えてくれ。何が正しかったのか、俺の代わりに見つけてくれ、と」わずかに目を細める。
「……あぁ、誕生日を祝ってやれなかったのが、心残りだな」
次の瞬間、ジェイは懐から銃を取り出し、迷いなくこめかみに当てた。――銃声。
そこで、意識は途切れた。

目を開くと、そこはセクター・ヴィータの施設内だった。さきほどの感覚は、夢だったのだろうか。
「具合はどうだ？」声をかけてきたのは、科学者のアレクだった。
アレクは静かに説明する。瀕死だった二人のうち、託生者にできたのは一人だけだったこと。
ジェイが、俺を託生者にするよう頼んだこと。そして――何が正しかったのか、俺の代わりに見つけてくれ。それが、最後の言葉だったこと。

俺は胸に手を当てる。貫かれたはずの傷は塞がっている。だが、何も感じなかった。
……なるほど、アンドロイドのコアがここにあるんだな。
ジェイは言っていた。俺はまだ、シェルター制御喪失事件の真実を知らない、と。
あのスパイ行為には、どんな理由があったのか、考えても答えは出なかった。

日付が変わる頃、搬入エレベーターの防衛は成功した。多くの兵士を失ったが、シェルター内の人類は守られた。その日、俺とエヴァが託生者になったと告げられる。

翌日。病室で横たわる俺のもとに、バーバラが現れた。ユニオンの兵士の情報記録を管理する担当者――ときにはカウンセラーの役目も担うと、ジェイから聞いていた。
「あなたが、ジェイさんと任務についていたんですね。お悔やみ申し上げます」
彼女は、記録としてジェイの最期について確認していく。俺は、一瞬、口を開きかけた。
――ジェイはスパイだった、と。だが、それは歴史に残る“記録”になる。
ジェイの名が、永遠に、反逆者として刻まれる。……それは嫌だった。

約十年、俺は彼の背中を見てきた。人類のために戦い続けた姿を知っている。あれがすべて嘘だったとは、どうしても思えなかった。
「なるほど……スパイを追った先で待ち伏せに遭い、過激派アンドロイドの攻撃を受けた、と」
バーバラは何かを考え込んでいた。
「辛いのに話してくれて、ありがとうございます。あとはこちらでまとめておきますね」
そう言って、バーバラは病室を後にした。俺は真実を知るためにも、統括官の部屋へと向かった。

統括官の部屋へ向かうと、中から叫び声が聞こえた。
「お姉ちゃんが……みんなが死んだのは……統括官……っ、全部あなたのせいだ！！」
扉が開き、飛び出してきたエヴァとぶつかる。彼女は涙をこぼしたまま、そのまま通路を駆けていった。――エヴァは統括官の娘の一人だ。部屋へ入ると、統括官は深く肩を落として椅子に座っていた。
「フリッツか……。君だけでも無事で、本当に良かった」かすれた声だった。
「昨日の戦闘で、我々は多くの命を失った。その中には、大切な親友も……娘もいた。地下シェルターには、迫り来る危機にすら気がつかなかった民間人がいる。――私が本当に守りたかったのは、どちらの命だったのだろうな」
こんなに弱った統括官を見るのは初めてだった。ジェイと二人娘の片方を同時に失ったのだ。
俺は、真実を問いただすことができなかった。やがて統括官は顔を上げる。
「……すまない、こんな姿を見せて。フリッツ。君に託されたコアは、ジェイが管理していた鍵で開けたと聞いた。それは三年前、君たちが捕らえた過激派アンドロイドのコアだ。来るべきときのため、保管していた。そのコアは、過激派特有の鼓動信号を放っている。拠点に察知されることなく、内部へ侵入できるはずだ。準備が出来次第、君には過激派への潜入捜査を命じる」
俺は任務を受けた。ジェイが接触した過激派から、何か情報が得られると信じて。

３日前
俺は統括官からの招集を受けた。部屋には、すでに託生者グレイがいた。
軽く挨拶を交わすと、グレイが端末を操作しながら作戦を説明する。
「過激派の基地を発見しました。座標はこちらです。ただし敵戦力は不明。小規模と推測されますが、重要な情報がある可能性は否定できません。調査の価値はあるでしょう。ですが、本当に問題ありませんか？過激派は独自の鼓動信号を放っています。それを持たない存在は、異物として感知されるはずです」
統括官は「問題ない」と短く答えた。その後、俺にだけ小声で告げる。
「君が過激派のコアを代用していることは伏せている。やむを得なかったとはいえ、敵のコアを宿す君を嫌悪する者もいるだろう。無闇に口にするな」
ブリーフィングが終了すると、俺は装備を整え、座標へと向かった。

過激派の基地内は、不気味なほど静まり返っていた。
巡回中なのか、それとも別の理由があるのか、敵の姿はほとんど見当たらない。
慎重に調査を続けるうちに、小さな部屋が目に入った。
そこには、過激派アンドロイドが扱うとは思えない紙の資料が置いてあった。

一通り目を通す。その中に、見覚えのある筆跡を見つけた。ジェイの字だ。
俺は紙を手に取り、読み進める。
「セクター・ヴィータの最重要プログラム、《メメント・ヴィータ》の情報を付属のメモリーに添付した。暗号は解けなかった。だが、これが起動すれば多くの生命が犠牲になるだろう」
…メメント・ヴィータとは、いったい。
その紙だけを別ポケットにしまい、他の資料を回収した。さらに奥へ進む。やがて、基地の中枢と思しきメインルームへ辿り着く。そこに表示されていたのは、ある作戦計画だった。
一週間後。セクター・ヴィータを含む、全セクターへの同時攻撃。理由は資源不足。
セクターからの物資強奪。過激派は、全戦力を投入する構えだ。
この戦争を、ここで終わらせるつもりなのか…？静かな部屋で、データの光だけが明滅していた。
過激派アンドロイドの基地を後にしたが、結局、大きな交戦は起きなかった。

俺は統括官のもとへ戻り、入手した資料を提出する。そして、一週間後に過激派による大規模攻撃が予定されていることを報告した。だが――ジェイが書き残した情報だけは、俺のポケットに残したままだった。統括官はすぐにルピナスをモニター越しに呼び出す。
「ルピナス、フリッツがうまくやってくれた。だが一週間後か…。今から防衛準備に取り掛かっても、時間はぎりぎりだろう。とはいえ、事前に情報を得られたのは大きい」
統括官とルピナスは、今後の防衛計画について淡々と話し始めた。だが、その声を聞きながら、俺の口は勝手に動いていた。
「……シェルター制御喪失事件について、もう一度聞かせてください。以前おっしゃったことが、真実なのでしょうか」
「もちろんだ」
短い答えだった。だが、その視線はわずかに逸れていた。きっと、すべては語っていない。
「分かりました。では――メメント・ヴィータとは、何ですか」
「……どこから、その情報を？」その瞬間、統括官の表情が明らかに変わった。
「ジェイから、昔聞いたことがあります」俺は嘘をついた。
統括官が口ごもると、モニターの向こうでルピナスが静かに語り始める。
「《メメント・ヴィータ》プログラム。それは、この戦争を終結させる可能性を持つプログラムです。ですが同時に、多くの生命を奪うことになる。諸刃の剣です。詳細をすべてお伝えすることはできませんが――ユニオンにおける最終兵器、と理解してください」

部屋の空気が、わずかに冷えた。そんな、兵器があるなんて…。
だが、それ以上の情報が二人の口から語られることはなかった。

事件当日

あれから、過激派アンドロイドの襲撃に備え、防衛体制は最大限まで引き上げられていた。
託生者の多いセクター・ヴィータでは、各セクターへ戦力を分散。
施設内には最小限の精鋭のみが残り、アンドロイド兵はそれぞれの防衛ラインへ送られていた。

ホールでは、託生者のディーン、エヴァ、グレイとともに、過激派の動きの想定を行っていた。
ディーンは「考えるのは苦手だ」と言いながら、俺たちの周囲をランニングしている。
呆れた視線を向けたそのとき、ディーンが足を止めた。
「……なぁ、何か変な匂いがしないか――」
その言葉と同時に、ディーンの体が大きく揺れ、崩れ落ちた。グレイが即座に叫ぶ。
「息を止めろ！」
俺たちはアイコンタクトだけで散開する。

廊下へ飛び出すと、すでに兵士たちが倒れていた。催眠ガスか――？
息を止められる時間には限界がある。俺は統括官の部屋へ向かう。
中には、床に倒れた統括官と、バーバラの姿があった。二人の顔にはガスマスクが装着されているが、どちらも意識はない。間に合わなかったようだ。俺は通信機へ駆け寄る。
「セクター１、応答せよ――」
繋がった瞬間、悲鳴が割り込んだ。
「セクター１！増援を求っ――うわぁぁあああ！」
「こちら、セクター２！過激派アンドロイドが毒ガスを散布している！た、助け――」
襲撃はまだ先のはずだった。なのに、なぜ今――。
ついに限界が来る。俺は息を吸ってしまった。わずかな甘い匂い。
次の瞬間、急速に意識が濁る。視界が歪む。そのとき、微かに機械音声が響いた。
「防衛システム起動。防衛システム――」
視界が暗転する。俺は、そこで意識を失った。

――どれほどの時間、意識を失っていたのだろうか。
ぼんやりとした意識の底で、施設内に響く声が聞こえる。隣には、バーバラと統括官の姿があった。
「ザザッ……みなさん、無事ですか？ こちら、ルピナスです。生存者は、至急メインホールへ招集してください」

過去まとめ

【10 年前】
・第二次アンドロイド戦争の開戦直後、父が戦死。母とともに統合生存圏へ移るが、与えられたのは外れの劣悪な区画だった。
・**《シェルター制御喪失事件》が発生。さらに母は配給所で暴漢に殺される。**
・母を殺した男を**ジェイに支えられながら、**自らの手で撃つ。
・その後、統括官とジェイのいるセクター・ヴィータへ向かい、**ジェイの小隊に入る。**
【8 年前】
・ジェイ小隊で初任務に出る。失敗して仲間に責められるが、ジェイに庇われる。
・ジェイから「**それが本当に“正しい”のか、問い続けろ**」、「**選んだなら、その意志を貫け**」と教えられる。いつしか、その背中を**父のように感じる**ようになる。
【5 年前】
・ジェイと共に、**過激派との接触が疑われる人間の確保任務**に就く。
・だが、過激派アンドロイドが介入し標的は死亡。**ジェイはその場で回収した小袋を隠し、何かを独自に調べ始める。**
【3 年前】
・**《託生者創造計画》の実験施設警備中、過激派アンドロイドが侵入。**翌日、**セレナの死とクラが託生者**になったことを知る。
・同時に、内部にスパイがいること、そして《**シェルター制御喪失事件**》の裏で、**第二次移住者虐殺が実際にあった**ことを統括官たちから聞かされる。
・以後、ジェイと共にスパイを探るが、**ジェイは過激派に対して異様に感情を失っていた。**
【半年前】
・搬入エレベーター襲撃事件の日、**“スパイ”の正体がジェイだったと知る。ジェイは何かを取り出すと、過激派アンドロイドへ差し出した。**
・フリッツはジェイを撃つことができず、**過激派の銃撃からジェイを庇い、自身も致命傷を負う。**
・その後、**ジェイの視点で記憶を視る。**瀕死のジェイは、**フリッツを託生者にするようアレクへ託し、自決する。**
・フリッツは過激派アンドロイドのコアを使って託生者となる。
・その後、ジェイの最期をバーバラに語るが、**彼がスパイだった事実は伏せる。**
【3 日前】
・過激派基地への潜入任務で、**ジェイが残した《メメント・ヴィータ》に関する文書**と、**一週間後の全セクター同時攻撃計画を発見**する。
・統括官に報告するが、ジェイの文書だけは隠し持つ。
【事件当日】
・施設内でガスが散布され、**統括官とバーバラが倒れているのを発見**する。
・各セクターから毒ガス散布の通信を受けるが、自身もガスを吸い、意識を失う。

用語解説

第二次アンドロイド戦争

現在進行中の、ユニオンと過激派アンドロイドとの戦争の総称。
百年前に発生した第一次アンドロイド戦争は、人類の勝利として歴史に記録されている。
しかし、敗北したはずの過激派は影で勢力を再編し、長い年月をかけて戦力を整えていた。
その結果として勃発した本戦争は、人類と穏健派アンドロイド双方を存続の危機へと追い込んでいる。
開戦から十年が経過した現在も、終結の兆しは見えていない。

託生者

託生者は、人為的に生成された人間の身体に《アンドロイドのコア》を埋め込んだ存在。
託生者はコアに保存された記憶や戦闘技術を再現することができる。
さらに身体が欠損・死滅しても、コアを研究施設《セクター・ヴィータ》へ回収すれば、同一の身体を再生成することが可能である。彼らは汚染された環境にも耐え、死を超えて戦い続ける。
それが、ユニオンが戦争のために創り出した“新たな生命”――託生者だった。

アンドロイドのコア

アンドロイドの心臓部には、《コア》と呼ばれる動力中枢が存在する。
人間の心臓とほぼ同じ大きさを持つこのコアは、アンドロイドの稼働と存在を支える要であり、意識や記憶の基盤でもある。
強度はあるが、銃弾以上の威力を防ぐことはできない。
コアが破壊された場合、記憶のサルベージは技術的に不可能とされている。
すなわち、アンドロイドにとっての「死」である。
――そしてそれは、コアを埋め込まれた存在である《託生者》にとっても、例外ではない。

世界規模ネットワーク

すべてのコアは誕生と同時に《世界規模ネットワーク》へ自動的に接続される構造を持つ。
これは、アンドロイドの開発者、アンディ博士によって設計された。
世界規模ネットワークとの接続は生命維持に必要な最低限の同期・維持処理を行うためのものだが、同時に、全てのコアへ干渉しうる唯一の経路でもある。
数百年を経た現在も、このネットワークは秘密裏に稼働し続けており、アンドロイドはその制約から逃れることができない。

統合生存圏

ユニオンによって建設・管理されている、人類のための巨大生存地域。生き残った人類はここに集約され、生活・生産・防衛のすべてが一元的に管理されている。しかし戦争の長期化により環境は著しく汚染され、作物の生産にも深刻な異常が生じた。地上での生活基盤は次第に維持困難となり、残された資源の大半を投入して、統合生存圏の地下に巨大シェルターが建設された。

現在、多くの人類は地上を放棄し、地下シェルターへ移住している。地下と地上を結ぶ正式な経路は、統合生存圏中央部に設置された搬入エレベーターである。

このエレベーターは地下への唯一の公的出入口であり、過激派アンドロイドから守るべき最重要拠点とされている。だが、その構造のすべてを知る者は、ごく限られている。

現在地上に住んでいるのは、過激派アンドロイドと戦うために地上に残ったユニオンの兵士。

彼らはセクターと呼ばれる拠点で生活している。セクターは統合生存圏地上部に点在し、平時は光学迷彩によって覆われ、敵からの視認を防いでいる。

そしてその中でも最も大きいセクターが託生者を生み出した「セクター・ヴィータ」である。

統合生存圏は、現在において人類が長期的に生存可能とされる、唯一の地域である。

セクター・ヴィータ

最初に建設された最古のセクター。研究棟が追加され、今の名称に変わった。

指定された座標データを用いることでのみ、セクター内部へ侵入することが可能である。

現在、セクター・ヴィータは最高責任者である統括官と、その補佐であるルピナスによって共同管理されている。セクター・ヴィータは研究セクターであると同時に、前線へ向かう兵士たちの中継拠点でもあり、各セクター（セクター1、セクター2など）には戦闘部隊が配備されている。

セクター内部は、研究区画・居住区画・医療区画・出撃区画など、明確な役割を持つ区画に分割され、厳重に管理されている。

過激派アンドロイド

もともとアンドロイドには、人間へ危害を加えられないセーフティ機能が備わっていた。

しかし過激派は、その制限を自ら排除することで、人間への敵対行動を可能にした。

その後、人間に似せた外見を捨て、戦闘に特化した身体へと再設計している。

現在の異形の姿は、対人セーフティを解除した存在であることの象徴でもある。

彼らは、通常のアンドロイドと同じく心臓部に《コア》を持つ。コアは高い硬度を備えており、刃物による攻撃では損傷を与えにくい。場合によっては、攻撃側の刃物が損傷することもある。そのため、過激派との戦闘では、コアを破壊する手段として銃弾以上の威力が有効とされる。

また、鹵獲や解析を防ぐため、自爆機能を搭載している。そのため、彼らのコアを流用することはできない。過激派は数百年前より人類と交戦を続けており、最終目的は人類の完全な絶滅にある。

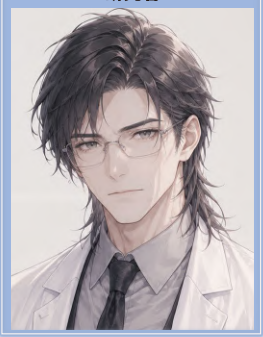
STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP

次ページ以降は指示があるまで開かないでください。

STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP STOP

登場人物　（公開情報）

アレク・ヴァレン
研究者



エヴァ・ソリス
遊撃兵



グレイ・ノア
参謀



ディーン・カルダー
突撃兵



クララ・ヴァレン
オペレーター



フリッツ・クライン
工作員



バーバラ・ロウ
カウンセラー



統括官　/　ルピナス
NPC



進行（公開情報）

序幕（４０分）
- キャラクター選択
- キャラクターブック読み込み　４０分

第一幕（２５分）
- 読み合わせ①
- 読み込み　１分
- 第１セット　調査７分
- 第２セット　調査７分
- 第３セット　調査７分

第二幕（５０分）
- キャラクターブック読み込み　２０分
- 読み合わせ②
- 第１セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第２セット　調査５分＋議論７分＝１２分

第三幕（６０分）
- 第１セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第２セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第３セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 第４セット　調査５分＋議論７分＝１２分
- 全体議論　１０分

終幕
- 推理発表（最大２分 ×７人 ＝14 分）
- 投票
- エンディング